

# 次郎長

題字 竹内宏

次郎長翁を知る会  
会報「次郎長」  
43号  
令和6年6月1日発行  
発行/編集  
次郎長翁を知る会  
会長 府川充宏

## 『次郎長さんが切り拓いた 清水港は今』

次郎長翁を知る会 会長 府川充宏

近年、大型で豪華な外国の観光旅客船がたくさん清水港に寄ってくれるようになりました。

北半球では三月、四月が国際クルーズ観光のピークという事ですが、四月には英国の海運業者が運営する『クイーン・エリザベス号（九万トン）』が寄港してくれました。

清水港客船誘致委員会事務局では、令和七年度には客船の寄港が百回程度まで膨らむ可能性を視野に入れていると報じております。

実際に大型船を見たり、こうした報道に接しますと、清水の次郎長さんの偉さが解る気がします。



写真は令和6年3月29日入港のセレブリティ・ミレニアム  
(写真提供: hatobars さん)

今から百五十年前。あの幕末・明治の段階で次郎長さんは、「将来の船は鉄の船」と成り、大きくなり、吃水が深く

なるから岸壁が必要になる」と、港の将来を見据え、大型船が発着できる港の必要性を地元の廻船問屋の主人たちに説いて回りました。そして江戸時代以来より

巴川河口の内の両側部分を用いた川湊として栄えた清水の港を、現在の地へ新たに作るべく、廻船問屋の主人たちと相談し合い、協力し合い、命がけで岸壁を作ったと言います。その時の遺構が『次郎長堤』と言われて現在もマリナーパークの片隅に残っています。

こうして次郎長さん達の作った岸壁を礎として、清水港は刻々と進化拡大して今日に至り、日の出の岸壁もこのほど天

規模な工事が完了。令和七年春以降は、大型クルーズ船二隻が同時に着岸可能となるそうです。

今この豪華な大型クルーズ船の出入りの様子や停泊を、もし次郎長さんが空から観てくれたら、どれ程喜び、幸せな気持ちになってくれるでしょうか、と思う処です。

国や県や市、会社など、その時代その時代に関係してきたたくさんの方々の努力と協力と継続が、こうして繁栄の方向、明るい方向に向かわせていただいていると思います。本当に有り難い事だと思います。

## 次郎長の盟友、横浜「神風楼」 主人の山口糸蔵について

次郎長翁を知る会 副会長 山本量正

### へはじめに▽

次郎長にまつわる人物は、俠客時代の子分や各地の親分衆、幕末から明治にかけての清水の廻船問屋を中心としたスポンサー、それに山岡鉄舟、天田愚庵、徳川慶喜、榎本武揚などの著名な人物を含

め数多の人物がいる。

それらの人物についてはこれまた数多くのいわゆる「次郎長物語」の著書あるいは講談・浪曲、映画などのなかで語られ、描写されてきており、中でも当会の柱であった故田口英爾氏の著書や末廣基談で詳しく描かれ解説されている。

また「ウィキペディア」などのネット検索により著名な人物はその概略を知ることが出来る。

ところで、それら「次郎長物語」のなかで、あまり目立たないがいくつかの著書や記事のなかに、横浜の遊郭「神風楼」、及びその主人である『山口糸蔵』（以下、「糸蔵」と略す）なる人物が出てくる。例えば、次のような記述である。

① 故田口英爾氏監修の次郎長の年譜には、

明治九年（一八七六） 次郎長、頻繁に横浜に行き『神風楼』に宿泊。

② 村上元三「次郎長三國志 続々」文芸春秋社（一九五四）の中には、

お蝶が静岡の監獄に収監中の次郎長を訪ねて行った時に、金網越しにお蝶が次郎長にかけた言葉として、『みんな元気ですから、安心して下さい。親分のことは、東京でも山岡先生が心配して下さるし、『横浜の神風楼の旦那』も、骨を折って仮出獄が出来るよう、ぼつぼつへ話をして下さいしているようです。』

また、波止場に「船宿 末廣」を建設する際の話として、『・・・お蝶の

発案で、屋号は「末廣」、汽船からも見えるように二階の屋根へ扇の地紙型の大きな看板を出すことを決めたが、金策が先だった。しかし、土地の回漕問屋播磨屋與平や松本屋、『横浜の神風楼』などが後援してくれるので、建築費用は間に合いそうだし、店が出来れば次郎長も、後顧の患いがなくなる。・・・」

更に、次郎長の晩年の話として、『・・・年をとるに従って、だんだん子供のようになり、相変わらず酒は飲まないのに、『横浜の神風楼』などでは「御飯の好きな親方」と言われるほどよく飯を食べた。』

③ 江崎惇氏の「誰も書かなかった清水次郎長」（昭和五十四年十一月第一版発行）では、

「次郎長が開いた英語塾」の項のなかで、『・・・次郎長も耳学問で、清水港は貿易をさかんになくしてはならない、とは聞かされていた。それにはやっぱり外国の言葉だと、（山田）昌斎の勧めた英語塾に乗り気になり、早速横浜に行き、『兄弟分の神風楼の久米蔵（ママ）』に頼み、イギリス人のパーマを清水に招請した。』（注：この「英語塾開設」の話は故田口氏ほか

諸説あり▽

④ 当会運営委員の中田元比古氏が、

「次郎長会報第三二号（平成二十六年六月発行）」に寄稿文「次郎長の富士開墾を再検証」を書かれているが、その中で、高島嘉右衛門と次郎長をつなぐ神風楼の山口糸蔵、そしてそのつながりの中で次郎長と「天照教」の関連についても言及されている。

・・・・・・・・・・・・・・・・

以上のような記述であるが、これらは、基本的に明治四十二年（一九〇九）に報知新聞に連載された三代目のお蝶の「俠客寡婦物語」に書かれている内容や、神風楼の山口糸蔵へ▽高島嘉右衛門という関係をベースにしていると思われる。

ただ、「神風楼」や「糸蔵」に関する記述は断片的で、また必ずしも多くはない。

そして、ネットで「山口糸蔵」を検索すると「糸蔵」本人の情報はなく、「山口仙之助」と言う「箱根富士屋ホテル」の創始者と言われる人物にヒットし、その経歴の中で「・・・（仙之助は）外国人向け遊郭「神風楼」の経営者・山口糸蔵の養子となり、・・・」と記載されているに過ぎない。

△今回まとめるに

至ったきっかけ▽

ところで、私は「故郷である清水」のほかに神奈川県川崎市に小さな拠点を持っている。「横浜」にも近いことから、この「横浜の神風楼」、そしてその主人で次郎長とも浅からぬ縁のあったという『山口糸蔵』にかねてから大きな関心を持っていて、折に触れて資料を集めていたが、なかなか具体的にまとめるまではいかなかった。

そんな時に、令和五年（二〇二三）八月三十日付け毎日新聞の「横浜古写真巡り」というコラムで、『次郎長愛した神風楼の飯』という見出しで『・・・「神風楼」では次郎長が来ると「そろそろ飯の好きな駿河の親分だよ」といって出迎えた。・・・』という記事に出遭い探求意欲が再燃、俄然精力的に調べてみ

**次郎長愛した神風楼の飯**

「横浜の神風楼」は、明治時代から続く老舗の遊郭で、次郎長もよく訪れたと伝わる。その名残として、楼内には「次郎長の部屋」が再現されている。また、楼内には「次郎長の部屋」が再現されている。また、楼内には「次郎長の部屋」が再現されている。

**古写真巡り**

「横浜の神風楼」は、明治時代から続く老舗の遊郭で、次郎長もよく訪れたと伝わる。その名残として、楼内には「次郎長の部屋」が再現されている。また、楼内には「次郎長の部屋」が再現されている。また、楼内には「次郎長の部屋」が再現されている。

る気になったのである。△写真参照▽

「国立国会図書館のデジタルアーカイブ」をはじめとする検索アプリを活用し、「山口糸蔵」とか「神風楼」、そして糸蔵の養子となった男が箱根の「富士屋ホテル」を創業したという話から、「富士屋ホテル」など関係ありそうな項目を次々に検索した。

また、静岡県立図書館や横浜開港資料館などの資料も蒐集し、更に、集めた資料からわかった「山口糸蔵」が眠る菩提寺「本覚寺」も訪れるなどして可能な限り「糸蔵」の謎に迫ろうとした。その結果、分かったことを大きく二節に分けて書いてみたい。

それは、まず前段として①横浜の遊郭及び「神風楼」の歴史、そして次に②山口糸蔵とその一族及び次郎長とのつながりなど、についてである。

(なお、次節①の「遊郭の歴史」については『遊郭』そのものについて触れることに抵抗なしとしないが、幕末から昭和前半までの歴史的事実として、また、次郎長と糸蔵を結びつけたモノとして書かせていただく。なお、以下の話は必ずしも一次資料で確認したものではなく、また諸説あることもご了承ください。)

## I. 横浜の遊郭及び

### 「神風楼」の歴史

#### ①「横浜遊郭」誕生のきっかけ

横浜の遊郭は、安政五年(一八五八)六月の「日米修好通商条約」を初めに、オランダ、ロシア、イギリス、フランス各国と結んだ修好通商条約に基づく安政六年(一八五九)の「横浜開港」に始まる。

実は各国との「修好通商条約」では、開港場はいわゆる「横浜」(今の横浜市中区)ではなく東海道の宿場町でまた重要な「湊」でもあった「神奈川」(今の横浜市神奈川区)とされていた。しかし幕府は「外国人との紛争を恐れる」とか種々の理由をつけて(本音は「江戸」から少しでも遠くしたい、東海道筋から遠ざけたい等の理由で)、「寒村」というより未開とも言うべき「横浜」の砂州を埋立て、港を建設することとした。(なお、各国はこれに反発し、「領事館」は当初「神奈川」に置いた)

この開港に当り、欧米側から「異人慰安の娼館設置の要望」があったという。

#### ②最初の遊郭

そして幕府は安政五年(一八五八)十一月、遊郭の設置を発表。候補地は「太田屋新田」(今の神奈川県庁などが

ある官庁・事務所ビル街)の中の五千坪(現在の横浜スタジアム周辺)とし業者を募集した。

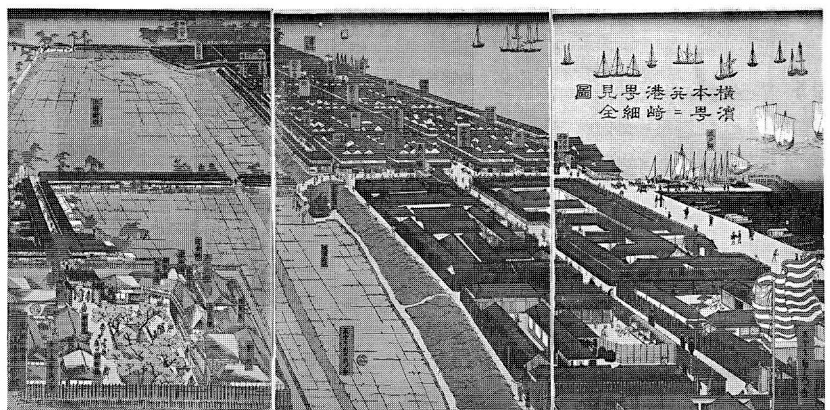
これに対し、神奈川宿や品川宿の旅籠屋が応募したが、工事が安政六年六月までの開港に間に合わず、とりあえず「駒形町」(現在の「みなとみらい駅」周辺)に、もともと幕府が下級外国軍人のために設置した簡易宿舎を利用して「駒形町仮宅(駒形遊郭)」とし、六月に営業を開始した。これがいわゆる「横浜遊郭」の最初である。

この時は五軒の妓楼(岩亀楼・出世楼・井筒楼・泉楼・保橋楼)と見番、料理屋、茶屋及び長屋で構成されていた。(この時はまだ「神風楼」は出ていない)

その後、太田屋新田の工事は紆余曲折の結果、品川宿の岩槻屋佐吉(岩亀楼主)が中心となり安政六年(一八五九)十二月「港崎(みよざき)遊郭」として本格的に完成し、駒形遊郭を移転した。

#### ③「神風楼」の開業

さて、山口糸蔵の「神風楼」であるが『万延元年(一八六〇)四月港崎細見』という資料に、その前身である「伊勢楼糸蔵」として出てくることから、この「港崎遊郭」から営業が始まったことになる。



(写真：左下の囲いの中が「港崎遊郭」(今の横浜公園))

この資料によれば「港崎遊郭」は妓楼一五軒、遊女三三二人。うち最大級は「五十鈴楼」三九人、「岩亀楼」三六人で「伊勢楼(後の神風楼)」は中位の二三人であった。

外にこの遊郭には妓楼の外「局見世」が計四四軒あり、遊女三三九人がいた。この遊郭は開設六年後の元治二年(一八六五)の『港崎細見』には、妓楼一六軒、遊女四〇六人、ほかに局見世

八〇軒、遊女六〇三人、(遊女総計一、〇〇九人)となっており繁盛ぶりが窺える。

#### ④「吉原遊郭」への移転

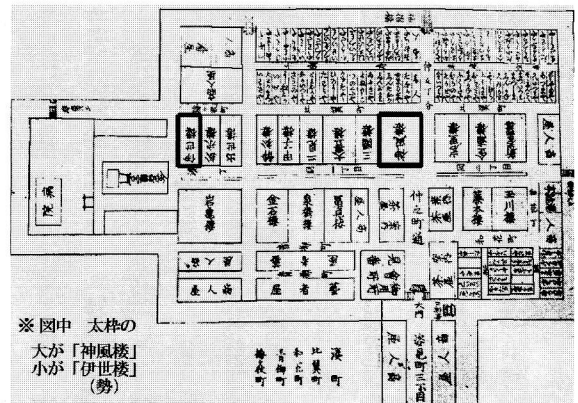
しかし、慶応二年(一八六六)十月、遊郭西側の豚肉料理屋から出火、遊郭のほか外国人居留地や日本人町など横浜の三分の一を焼き尽くす大火となった。この時遊女四〇〇人以上が焼死したという。

其の後、翌十一月には「岩亀楼」を含む数軒は、近くの「太田町」(現在の常磐町あたり)に仮設移転し、ほかも周辺の民家を借り受けて営業を再開したが、遊女の調達や再開費用の捻出が出来ないものは撤退を余儀なくされたという。

このとき「伊勢楼」も被災したと思うがどのような行動をとったかは残念ならわかない。

いずれにしろ、「遊郭」は元の場所での復興はかなわず(この場所はその後、明治九年(一八七六)に避難所を兼ねた洋式公園(現在の横浜公園)となった)、慶応三年(一八六七)五月、吉田新田北(現在の伊勢佐木町近くの羽衣町あたり)に「吉原遊郭」として復活した。

この「吉原遊郭」移転に際し、山口桑



(写真：吉原遊郭図)

蔵は「伊勢楼」を姪の「山口トメ」に譲り、桑蔵自身は「神風楼」を新たに経営することになった。

『横浜市史稿』によれば、『・・・従来「岩亀楼」のみであった異人揚屋を率先して開放し、自由営業としたのは彼(山口桑蔵)であった。

これはただに「岩亀楼」に対する独占的行為に反感をもった単なる理由ではなく、外国人の富を吸収するのは国富を豊かにする所以で、実に自他の取るべき営業策と慮した、その抱懷を具体化した結果であると言われている。・・・と書かれている。

このころより、従来トップの座の「岩

亀楼」に代わり「神風楼」の勢いが増してくる。

明治二年(一八六九)の細見記によると、妓楼は一九軒、遊女四二四人、ほかに局見世八四軒、遊女九六三人(合計一、三八七人)となっており、元治二年(一八六五)に比べ、三七八人増加している。

⑤新橋・横浜間の鉄道開業と吉原遊郭の火災

さて、このころ「横浜」に多大な影響を及ぼす事柄が起きてくる。それは鉄道の建設である。明治二年(一八六九)十一月、新橋―横浜(現桜木町)間の鉄道建設が決定した。そして「高島嘉右衛門」(あの次郎長の「富士山麓開墾」に縁のある人物)の登場である。

当時、嘉右衛門は横浜関内の尾上町に「高島屋」という大旅館を経営していた。伊藤博文、大隈重信らと親密で、鉄道や駅舎用地の造成許可を得て埋立を開始、明治四年(一八七二)には造成した土地を工事費用の代わりに取得、「高島町」と名付けた。

(高島嘉右衛門については後述するが「実業家」「政商・フィクサー」「高島易断」など多彩な顔を持つ人物である)そして彼はこの取得した土地の有効活用

を模索していた。

一方、「吉原遊郭」であるが、徐々に周囲も発展してきていて風紀上の問題から神奈川県では当時の県令陸奥宗光により「遊郭の移転」の話がでてきた。そんな状況の中で明治四年(一八七二)十二月、またもや「吉原遊郭」の一角から出火、遊郭の過半を焼失し溺死、焼死の犠牲者は三〇余人を出した。

「岩亀楼」を含む約半数の妓楼は焼け残り、火災後も同地で営業再開したが、「神風楼」を含む半数の妓楼は焼け出され「長者町九丁目仮宅」に移転した。

#### ⑥「高島遊郭」への移転

そして明治五年(一八七二)七月、妓楼代表の「神風楼」の山口桑蔵と岩亀楼の佐藤佐吉は、高島嘉右衛門と合意の上で「高島町」への移転を進めつつ、連名でその地への正式な遊郭移転の嘆願書を神奈川県に提出した。

新橋―横浜間の鉄道はこの年の九月に本営業を開始しており、政府と神奈川県は妓楼主に鉄道駅の直近に「遊郭」は好ましくないと言業の差し止めを要望するが「高島嘉右衛門」が関与した事業だけに差し止めは容易ではなく、明治五年(一八七二)秋、結局使用期限十五年という制約をつけて営業を認めた。この年



(写真は高島町駅舎近くの「神風楼」)

の末には長者町他に仮営業中の三〇軒の妓楼も移転を完了、「高島遊郭」として営業を開始した。

「神風楼」は高島町二丁目(現在の高島町の北東側)の富士見橋際海岸側に、「岩亀楼」と相対して城郭式三層楼の和洋折衷館を両翼にした大建築となっていた。

右方を日本人、左方を外国人専用とし、異国ぶりの豊かな機材什具を設備し、稼業は益々栄えた、と言われている。

#### ⑦最終的な「永真遊郭」への移転

しかしこの「高島遊郭」も当初十五年期限との条件であったが、明治十三年(一八八〇)には県令から横浜駅周辺の風紀上を理由に、明治十五年(一八八二)四月限り(つまり期限を五年短縮)で山吹町(のちに現在の(南区)永楽町、真金町に改称)に移転するように令達を受けた。しかるに、またまた災難が襲う、それは明治十三年(一八八〇)九月の台風で、遊郭は多大な被害を被った。同地での営業再開の目途が立たず多くの楼主は次期候補地への移転を希望した。ただ、まだ新たな候補地の造成はできていなかったため一部は明治十四年(一八八一)四月、「長者町三丁目仮宅」に一時的に移転した。

明治十五年(一八八二)五月、新遊郭(永楽町、真金町にまたがる「永真町遊郭」)が出来、移転を開始した。同時に「高島遊郭」の取り壊しが始まったが、「神風楼」はしばらく居残りを続けた。その経緯は以下の資料に詳しい。

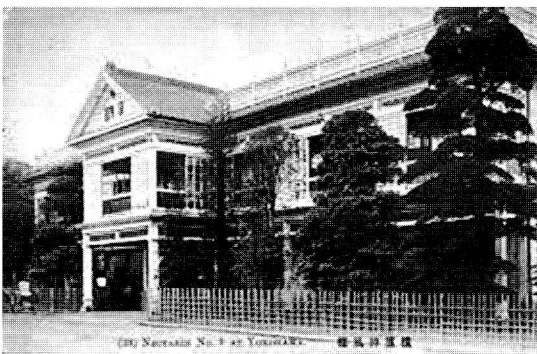
「自警四一(一二) 警視庁警務部教養課編 出版：自警会(一九五九年十二月)」という警察関係者の書籍の中の「明治時代の警察部長」と言うタイトルで「高橋雄豹」なる人物が書いている記述である。

述である。

#### 「神風楼移転問題」

『・・・高島町遊郭を県会の決議により真金町に指定した。各妓楼は命令通りに移転したが、ひとり神風楼だけが移転延期を願い出て居残っていた。「神風楼」は大妓楼で、楼主の山口増吉(注：衆議のことか)は早くから任侠を謳われ、維新前には勤王の志士を援助したことがあり、自然、維新後の当局者に縁故が多く、就中当時の内務次官芳川顕正、神奈川県書記官石田英吉等とは特別に懇意であった。そんなことから神風楼だけが真金町への移転延期が再度まで認められて数年に及び云々・・・』

△要は「神風楼」は政府高官に顔が利い



(写真は永真遊郭の「神風楼」)

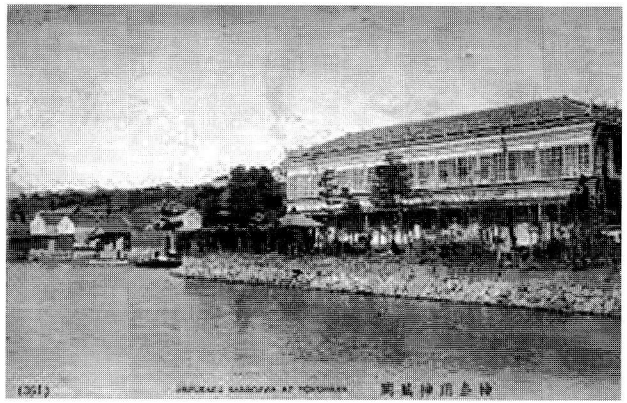
たという趣旨の内容である▽

しかし結局、明治十七年(一八八四)春、神風楼は移転することとなり、「永真遊郭」に新館を建てた。と同時に明治二十年(一八八七)には神奈川七軒町埋立地にも高島町遊郭の建物を移築して開業した。(二軒の「神風楼」を営業したことになる)

明治二十六年(一八九三)の「永真遊郭」の妓楼一覧によると遊女四四人の大妓楼から四人の小妓楼まで五三軒あり、「神風楼」は三五人、甥の山口綱吉が経営する「二月楼」が一八人であった。

#### ⑧神奈川七軒町の「神風楼」

神奈川七軒町の建物は、前述のように高島遊郭の建物を移築、増築したものであるが、明治四十四年の「横浜貿易新聞」によると「・・・十五万円の大金を投じ、輪奐(りんかん)の壮美を極めた大建築にして、二階三階の日本建家屋は建坪一二〇〇坪、中にも其の一角より折り返したる三層造りの如きは、屋上高く相対して金鯱目に輝き、勾欄水に映じ、自営の大電灯近く前湾を圧し、・・・」とあり、更に続けて「・・・棟続きなる二階建四〇〇坪の洋館は更に外国人を迎えて不夜城の歓楽場となし・・・」と明治二十年代の豪華



(写真は神奈川県七軒町の「神風楼」)

絢爛さ繁盛ぶりを記している。

この神奈川県七軒町遊郭も明治三十三年(一九〇〇)に「神奈川県令」により東横線「反町」周辺に「反町遊郭」として移転させられたが、神奈川県七軒町の「神風楼」はこのとき廃業し「永真遊郭」のみに集約したと思われる。神奈川県七軒町に残った建物はその後波乱の運命をたどることになるがここでは割愛する。

#### ⑨山口桑蔵没後の神風楼

桑蔵は明治二十六年八月十九日死去した。何と次郎長の死後二ヶ月と少しであつた。

(「桑蔵」については次節で記述する)



写真・「神風楼」の額は山岡鉄舟の書

永真遊郭の「神風楼」は、明治二十七年(一八九四)四月の火災で焼失したとする資料もあるが、明治四十三年(一九一〇)に出版された横濱成功名譽鑑(横浜商況新報社編)には、「・・・重(おも)なるものは勢州、神風、一月、二葉、・・・」と記されていることから、「神風楼」が妓楼として繁栄していることを意味するものといえる。

大正九年(一九二〇)には神風楼敷地内に温室を建て、当時流行していた菊を栽培し秋に菊祭りを開催するなど内外に喧伝されたという。

大正十二年(一九二三)日本商工通信社発行の「職業別電話名簿東京・横浜一二版」には貸座敷業の部に神風楼(山口美代)、一月楼(山口綱吉)の名が見える。だが、大正十二年九月一日、「関

東大震災」で甚大な被害を被ったようだ。

神奈川県震災史(神奈川県編。昭和二年)によると『・・・永楽町「神風楼」こと山口美代方には二三名・・・の多数死者を出しき・・・』とある。この時、山口美代も犠牲となり、万延元年(一八六〇)に山口桑蔵が開業した「神風楼」は実質的にこの震災で廃業したと思われる。

へなお、「永真遊郭」は昭和三十三年(一九五八)三月の売春防止法で終焉を迎えることになる。また、「神風楼」とトップを競った「岩亀楼」は楼主の佐藤佐吉が永真遊郭に移転を控えた明治十六年(一八八三)一月に死去、またそれ以前明治十四年(一八八一)に神奈川県庁より税金滞納を起すなどしており、明治十七年九月の台風の被害をきっかけに廃業となっている。

## II. 山口桑蔵について

神風楼の歴史の記述の中でも触れてはきているが、諸資料からの人物像は次の通り

(出典は一部割愛させていただく)

#### ①出身と人物像

栃木県石橋町(日光街道の宿場町。現

在の下野市)出身というが、その二次資料は残念ながらわからない。また、その親を含めた先祖、生業なども全く不明である。

ただ、集めた資料には『・・・時代の変化を嗅ぎ取ったことで横浜に出てきたのか、「港崎遊郭」に「伊勢楼(のちの神風楼)」を開業・・・』とか、『生来気概に富み、志士と交わり、時流を洞見する新進の人物であった。(横浜市史稿)』とかあり、また前述の通り『任侠を謳われ、勤王の志士を援助』などと記述されている。

また次の資料がある。

『港湾二三(四)(一三三)』日本港湾協会発行(昭和十年(一九三五)一〇四)のなかで、

「明治前後の横濱」というタイトルで中野凡吉氏の、

『・・・当時なお尊王攘夷の風が依然として遺されていたことで、遊女屋渡世の如きには猶更国粋派が跋扈していた事実は、その屋号にもよく現われ、例えば日本は神国であるという自信から、伊勢または伊勢何々楼としたものの多いのは勿論、二見楼、神風楼、神国楼、五十鈴楼など命名したのはその一端である。・・・』

△なお、蛇足ながら和歌で、「伊勢」の枕詞は「神風」である▽

## ②本覚寺の墓碑

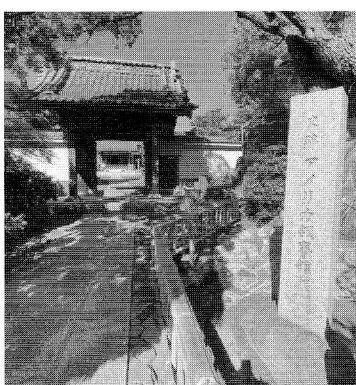
京浜急行線「東神奈川駅」と第二京浜国道「青木橋交差点」そばの高台に曹洞宗「本覚寺」がある。（横浜市神奈川区高島台）

嘉禄二年（一二二六）に栄西が創建と言われる古刹であるが、一時荒廃し、享禄五年（一五三二）に曹洞宗として再興された。

安政六年（一八五九）の横浜港の開港に合わせてアメリカ領事館が置かれた。（文久三年（一八六三）に横浜関内の外国人居留地に移転）

この由緒ある寺の最も高台の眺めの良い場所に「山口糸蔵」とその一族の広大な墓がある。（下写真参照）

ただ、この墓地には万延元年（一八六〇）に糸蔵の養子となり、明治



（写真は本覚寺の山門とアメリカ領事館の記念碑）

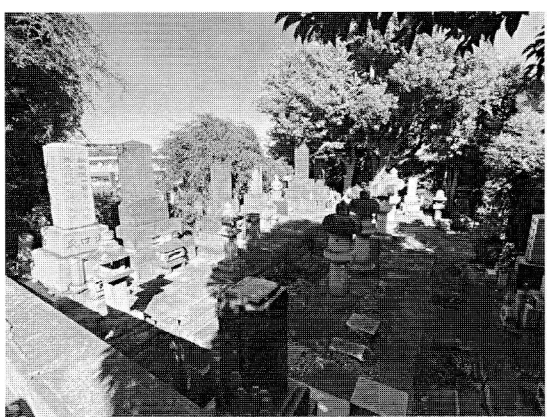
十一年箱根の富士屋ホテルを開いた「山口仙之助」、及びその直系は葬られていない。

「外国人向け高級ホテル」の経営者とその直系子孫は「神風楼」という「遊郭」、そしてその創業者である「山口糸蔵」と決別しなかったのだろうか。

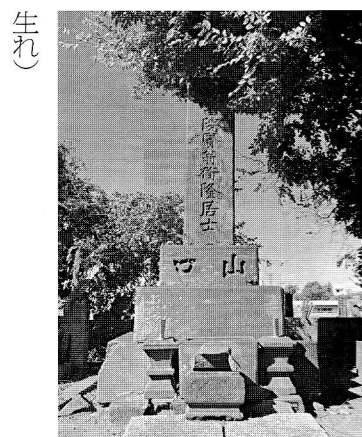
墓域に入って正面奥にひととき大きな糸蔵の墓碑がある。（下写真）

墓碑及び墓誌によると戒名は「久昌院賢翁衛隆居士」没年は明治二十六年（一八九三）八月十九日で、何と次郎長とわずか二か月と少しの違いである。

行年は六十三歳であることから生年は逆算して天保二年（一八三一）と推定される。（次郎長は文政三年（一八二〇）



墓地全景



生れ）

墓誌には妻と思われる人物はなく、養女（糸蔵の姪といわれる）と思われる「トメ」の名が刻まれている。

（戒名「慈徳院真善妙遊大姉」）昭和三年十二月二十日没、行年八十二歳）

「神風楼」系の山口家と「富士屋ホテル」系山口家は疎遠となったと思われるが、明治十六年の富士屋ホテルの大火後の復興の際には糸蔵は仙之助に資金援助しており、明治二十六年の株主として「糸蔵」子息の山口増太郎ほかの名前がある。

なお、人事興信録等によると「山口仙之助」の経歴は次の通り

嘉永四年（一八五二）五月五日生まれ  
万延元年（一八六〇）山口糸蔵の養子となる。

明治十年（一八七七）糸蔵の次女「ヒサ」（安政六年（一八五九）生、昭和二十五年（一九五〇）没）と結婚して分

家したと推測。

明治十一年（一八七八）箱根宮ノ下の温泉旅館「藤屋」を買い取り、「横浜高島町神風楼支店富嶽館」を開業（後に「富士屋ホテル」に改称）

温泉村の村長や箱根地区の国道の整備、水力発電所の建設など公共事業にも尽力。

大正四年（一九一五）三月二十五日没

## ③次郎長と山口糸蔵の出会い、接点

次郎長と糸蔵の出会いはどうなであつたろうか。

前述したように糸蔵は出身が栃木県の石橋、現在の下野市と言われている。

「石橋宿」は日光街道及び奥州街道の十五番目の宿。当時天領とされ、天保十四年（一八四三）には本陣一軒、脇本陣一軒が設けられ旅籠が三〇軒、宿内の家数は七九軒、人口は四一四人であったという。

ところで、この石橋出身の「伊沢順三」なる人物が糸蔵の養女「トメ」の娘に嫁ぎ、一時「山口順三」を名乗っており、「神奈川七軒町」の「神風楼」を廃業した後の建物を使い料理屋を開いている。実は、石橋宿の宿役は「伊沢氏」一族が交代で務めたという。

この伊沢順三がその末裔であるか不明

であるが、山口家と何らかの関係がある  
とすれば、糸蔵が横浜に出て「妓楼」の  
経営を始めたのは、石橋宿でいわゆる  
「飯盛宿」でもやっていたのだろうか、  
また前述の人物像から宿場の顔役であっ  
たのだろうかと推測したりもする。侠客  
時代の次郎長がこの「石橋宿」を訪れた  
ことはあったのだろうか？

次郎長が渡世の道に入ったのが天保  
十三年（一八四二）、人生を変えたのが  
明治元年（一八六八）で、糸蔵が生まれ  
たのが推定で天保二年（一八三一）であ  
る。次郎長の足跡は高橋敏氏の著書「清  
水次郎長」にあるが、上野国（群馬県）  
は通過しているものの下野国（栃木県）  
は記録がない。

糸蔵が「港崎遊郭」に神風楼の前身で  
ある「伊勢楼」を開業したのが万延元年  
（一八六〇）で三十歳の時である。それ  
まで「石橋宿」にいたとすれば四十歳前  
後の渡世人「次郎長」と出会っていた可  
能性も否定できない。

一方、故田口氏監修の年表では『明治  
九年（一八七六）次郎長、頻繁に横浜に  
行き「神風楼」に宿泊。』とある。残念  
ながらこの一次史料が見つからず検証は  
出来ないが、次郎長縁者の清水の妓楼と  
のつながりで、高島遊郭へ移ってからの

出会いとも考えられる。

この明治九年頃の神風楼は、前節の  
「神風楼の歴史」で記したように高島嘉  
右衛門が造成した「高島遊郭」にあり、  
老舗の「岩亀楼」と張り合い徐々に勢力  
が上回ってきた頃である。

#### ④次郎長と糸蔵の濃い関係

次郎長が賭博の罪で収監されたのが明  
治十七年、特赦を受けたのが明治十八年  
（一八八五）であるがこの時の経緯が  
三代目お蝶の「侠客鼻婦物語」（その  
一一）に次のように書かれている。

『……皆さんが東京の方で心配して  
下さったのが妾が奈良原さんへ上がって  
からです。殊に神奈川の久米蔵（ママ）  
という人なんかの盡力は通常ではありません。  
せん。この方はその頃神風楼の主人で長  
五郎とは兄弟のようにしていたんですか  
ら『おれが一肌脱がにゃならん時が来  
た』とこう申して、大蔵省の書記官で飛  
ぶ鳥を落とすような威勢のある成川さん  
という方に万事お願いしたのです。その  
頃は長五郎を捕らえたのは失態だとか  
で、静岡県令の奈良原さんが辞められ、  
あの汽車で死んだ関口さんという方が新  
規になって来た時でございます。妾共女  
でして、県令と大蔵省の書記官はどれだ  
け違う位は知りませんが、何でも成川さ

んが大蔵省の勢力でもって関口さんをお  
呼びなされては『長五郎のことは是非頼  
む』といいましたもんですから、とにかく  
出獄という事になりました。何でも承  
る處によりますと仮出獄ということとは  
この時初めて搾えましたもので、いわば長  
五郎の為だといいました。これにつきま  
しては神風楼の主人がどれだけお金を  
使ったかもしれません。』

⑤山口糸蔵の人脈  
前述の通り、糸蔵をめぐる人々の名を  
挙げてきたが、少し付け加えると以下の  
通りである。

A. 高島嘉右衛門（天保三年（一八三二）  
生→大正三年（一九一四）没）  
（糸蔵は推定で天保二年（一八三一）生  
れであり、ほぼ同年である。）

嘉右衛門は前述の「鉄道敷設」「高島  
町造成」「高島遊郭開業」を通して糸蔵  
と密接な関係があったと思われる。この  
ほか諸外国公使館の建設、大旅館「高島  
屋」を経営し伊藤博文、大隈重信など政  
府高官との人脈作り、英仏独の三か国語  
を教える語学中心の「高島学校」の創設  
など、横浜の発展に寄与すると同時に  
「高島易断」を創設し、政治問題から個  
人問題まで占っている。

また、物語（その一六）の文中の  
「次郎長の好物」では『……猪肉が  
大好物……これに続いて飯が大好き  
で……大食家の方でござんしょう、で  
ございますから清太郎を連れて神奈川の  
神風楼へ参った時なんか「駿河の飯の好  
きな人が来る」といわれ、ちゃんどん  
ぶり見たような大きな茶碗さへ前もって  
用意された程ですから話をしている間  
に、五杯も六杯もやっちゃ「俺は何杯食  
べたかな」とよく聞くことがありまし  
た」と、大食漢で飯の大好きな様子を話  
している。

なお、嘉右衛門の長女たま子は伊藤博  
文の養子博邦（井上馨の甥）と結婚して  
いる。

大正三年（一九一四）十月、享年  
八十三歳で死去。葬儀は糸蔵の菩提寺  
「本覚寺」で行われたが、墓地は東京高  
輪の泉岳寺にある。

B. 伊藤博文・大隈重信・陸奥宗光  
前記の通り高島嘉右衛門は伊藤、大隈  
とは密接な関係であり、また陸奥は明治

四年（一八七二）〜明治五年（一八七二）に神奈川県知事を務めており、この間「高島遊郭」移転問題の当事者でもあり、嘉右衛門とのつながりもあった。

このことから衆蔵も「嘉右衛門」を通してこれら要人とも接触があったと考えられ下記の大蔵官僚、内務官僚もこれら要人が背後にいたと考えられる。

C. 成川尚義（なりかわなおよし）

次郎長が横浜に通っていた頃の大蔵官僚（もとは内務（警察を所管））の三重県知事、貴族院勅選議員など歴任）

次郎長の「次郎長寡婦物語」（その一）の中に『・・・何でも成川さんが大蔵省の勢力でもって関口さんをお呼びなされては「長五郎のことは是非頼む」・・・』とあるように次郎長の特赦に大きな影響力を発揮した人物である。

D. 芳川顕正（よしかわあきまさ）

次郎長が捕縛された頃の内務（警察を所管）大輔。

のち司法、文部、内務、通信の各大臣。貴族院議員、枢密院副議長など歴任。

神風楼が高島遊郭から移転する際に衆蔵の為に影響力を発揮した人物である。

E. 徳田寛豊

明治二年（一八六九）、天照教の創始

者。ペリー来航ののち尊王攘夷の思想をもち、水戸浪士と共に「桜田門外の変」にも関わったとされる。

富士山麓の標高一、〇〇〇mに所在する「天照教社」の案内板によれば『明治十二年、内務卿伊藤博文、静岡県知事大迫貞清から「天照教社」の許可を受け、西郷兄弟、品川弥二郎、山岡鉄舟、清水次郎長、高島嘉右衛門等の援助により境内地を開墾、明治十四年に伊勢の天照皇太神の分霊を奉遷して建てられた』と書かれている。

衆蔵の「神風楼」は初め「伊勢楼」と称し、前述の「人物像」と相通ずるものがあると思われる。衆蔵も天照教社建設に何らかの尽力をしたものと推測される。

### ＜終わりに＞

「神風楼」と「山口衆蔵」を調べていくうちに次々これまで知らなかったこと、また関連事項の多さに驚いた。だが、まだまだ不明な事柄は多いと思う。

それでも大分長文になってしまったが、会員の皆様には是非お伝えしたいという真情からのものでありご容赦いただき、お読みいただければ幸いである。

史跡探訪ツアー 令和五年十一月十五日

## 次郎長の富士開墾と 富士山世界遺産巡り

運営委員 北村昭夫

今年度の研修旅行は次郎長が開墾した

富士山裾野に残る史跡の探訪と、富士山世界文化遺産登録十周年を記念して開墾地周辺にある構成資産を巡るツアーを企画した。参加者は十六名と少なかったが、皆早々と集まり静鉄観光の中型バスに乗り込んだ。今回も前回と同じ池田運転手がこやかにハンドルを握り、曇り空の中を一路富士市へ向かった。

### 【吉原本町・鯛屋旅館】

最初の目的地は鉄舟や次郎長が常宿にしたという鯛屋旅館だ。大旦那で当会の会員でもある佐野大三郎さんと、同所で本手打鯛屋という蕎麦処も経営している息子の佐野佳之さんに説明をして頂いた。この旅館の創業は天和二年（一六八二年）で、三百四十年余りもの長い間営まれている。玄関に入ると吉原宿に大名が泊まる際に、家来の宿泊予約に書いた宿札がズバリと並んでいて壮観

だ。

また江戸時代において、身延山への参拝時の宿として認められた事を示す『身延山参拝指定旅館札』も掲げられていて古い歴史を感じた。

そして山岡鉄舟が「鯛屋與三郎」と書いた長さ二メートル程もある立派な大看板が目につく。鉄舟がこの地を訪れた折



に宿泊し、その感謝の気持ちを表して当時の主人の名を書き残したものだということから余程気に入ったのだろう。

旅館を出る時には背中に火打石で鑽火を切って頂き、この先の道中安全をお祈りして出発した。

### 【今泉・瑞龍山法雲寺】

次に向かった先は、次郎長の子分であった俠客辻の勝五郎のお墓がある法雲寺。境内には水汲み場があるほど綺麗な富士の湧水がとくとと流れ、お墓はそのすぐ傍にあった。勝五郎は本名を加藤勝五郎といい、天保七年富士郡今泉村で生まれた。生家が菩提寺であるこの寺の



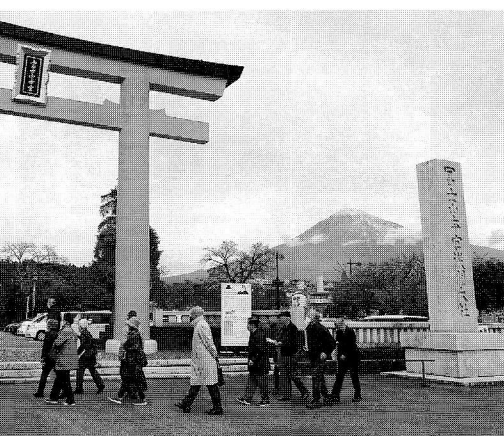
裏手の辻にあったので「辻勝っさん」と呼ばれたという。勝五郎は初め増川村の佐治郎の子分となったが、佐治郎は浪人者らにより暗殺された。佐治郎の倅仙右衛門は、一の子分だった勝五郎と共に遠州小松村に赴き仇を討った。この義侠を次郎長が知るところとなり次郎長一家の身内となった。大洲での開墾を成すにあたっては地の利を生かして、食糧調達や小屋資材の提供等に奔走し尽力したという。事業には欠かせない一人だったと言える。維新後は檀徒惣代を永年勤め献身的に貢献し、明治四十年七十二歳で死去しこの寺に葬られた。墓の横には勝五郎の生涯を紹介した看板もあり、地域に親しまれただろう人柄が偲ばれた。

### 【富士山世界遺産センター】

この施設の内は県世界遺産ガイドを務める地元の櫻場忠夫さんをお願いした。彼は清水みなと祭りの次郎長道中でも長年活躍をしている人なので、参加者とも顔なじみで半分身内のような人だ。まず世界遺産に登録された経緯などの説明を受け、富士ヒノキを繊細に組み上げた斬新なデザインの館内に入った。そこから富士登山をする形で螺旋スロープを登って行く。壁面に映し出される三保松

原から原生林そして溶岩帯の映像を眺めながら最上階の五階に上がると、正面には圧倒的な迫力で富士山が聳えていた。いつも見慣れている霊峰ではあるが、その秀麗な姿に皆は大感激。改めて富士山は日本の誇りであり、日本人の心の故郷であると再認識した。

### 【富士宮浅間大社】



午後からは富士山の噴火を鎮めた御神徳により崇敬を集める浅間大社に移動した。全国に祀られた千三百余の浅間神社の総本宮である。ここも引き続き櫻場さんの説明を受けながら大鳥居をくぐり参道を進む。楼門前にある鉾立石の謂れを聞いて山宮御神幸という富士山信仰の神事を想い描いた。手水舎でお清めをし、徳川家康公が寄進した御神域に入る。正面には朱色も鮮やかな拝殿と、その奥には主祭神の木花之佐久夜毘売命を祀る二重楼閣造りの本殿が輝いている。横には信玄公お手植えの桜の老木があり、武田が支配していた時代があった事を思い出した。協門を出ると湧玉池があり、何層

にも重なる溶岩の間から富士の雪解け水が湧出している。この水が神田川となって流れているが、その水量の多さには驚くばかりだ。傍らには次郎長とも少なからず関わりがあったと云われる駿州赤心隊の碑もあり感慨深かった。

### 【富士宮栗倉・天照神社】

次に標高千メートルの高地にある天照神社へ向かう。ここは明治時代になり伊勢神宮から分霊して開設した神道系の新興宗教本部で、桜の名所としても有名な。数万坪もある境内地の造成に当たっては西郷兄弟、品川弥二郎、山岡鉄舟、清水次郎長、高島嘉右衛門等が関わった



そうだった。ここには次郎長お手植えの桜の木があり、また柿やスモモも植えたそう。その関係の深さが窺える。ただ解説して下さった山本量正さんも仰っていたが、未だまだ不明な部分が多い場所なので今後の研究が待たれる。

### 【村山浅間神社・興法寺】

村山は富士山における修験道の中心地であって、明治政府の神仏分離令により廃されるまで興法寺という寺院があった。鎌倉時代には末代人に關連する修行者により寺院が成立したと考えられ、周辺には坊が建ち並んでいたという。ここでは元氏子総代で県世界遺産方

イドの山本哲さんに案内をして頂いた。境内には水垢離場や護摩壇などがあり修験の様相が伝わってきた。

特別に開けて頂いた興法寺の境内には、大日如来坐像や不動明王として役行者などの木像がズラッと並んでいて、当時の富士山信仰の根深さが窺えた。ただ中には首を落とされた石仏もあり、廃仏毀釈の愚業も目にして切なかった。

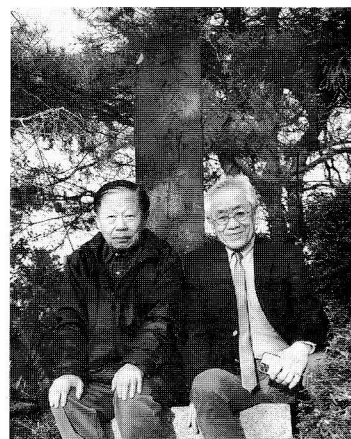


### 【次郎長町・白髭神社】

いよいよ開墾の中心地である大洲に到着。ここからは(財)するが企画観光局理事長で浮月楼社長の久保田隆氏も参加下さった。ここでの案内は地元の郷土史家

であり、当会会員の荻野三子男さんをお願いした。次郎長は、県令の大迫貞清や山岡鉄舟の指南を受け明治七年から、富士大洲の開墾を開始した。労働力としては静岡監獄(江尻)に投獄されていた囚人を雇い入れた。そして七十六町三反歩(七十二ヘクタール)の荒野の土地の雑木や雑草と闘い、岩を砕く苦しい労働を重ねる。

現場の指揮官は当初は大政であったが、大政が死去した後は天田五郎が責任者として勤めた。しかし瘦せた土地では農作物を作る事はとても難しく、融資も思うようになく資金が底をつき、明治十七年に開墾の挑戦は終止符が打たれ



(写真右…久保田氏 左…府川会長)

た。打ち切りと同時に土地は国に返納され紆余曲折したが、そのうち町村制施行に伴って各地より入植者が相次ぎ、今の広大な面積を誇る林業と農業の大洲地区が誕生した。この地には「次郎長町」という地名が付けられ、白髭神社境内にはその偉業を顕彰し、後世に伝える記念碑が建立されている。次郎長の開墾は失敗に終わったが、その道を開いたのは明らかに次郎長であり、その功績を忘れないという地元の人々の想いに頭が下がった。

### 【村山神成・渡邊宅】

次郎長は開墾のために現場へ向かう途中で日が暮れてしまい宿を探していると、米が点々と落ちていたのを見つけた。辿った所が渡邊長右衛門宅で一夜の宿を願った。大洲の開墾地に杉皮屋根の家が出来るまでは、渡邊宅から現地へ

通ったそうである。当時神成村の農家は大きな山持ちの豪農が多く、「わしは神成のものだ」と言ったら他の村の人々からは羨ましがられたというから凄い。

渡邊家には今も次郎長から頂いた舟簞筒があり、御主人の渡邊俊次さんに説明をして頂いた。隠し小箱付きの舟簞筒の引き出しには「長ドスの先端」が入っていて、長脇差しの先端部分を小刀にした物だそうである。次郎長たちの開墾地には水が出ないので、同じく神成の藤村屋敷近くにある小さな滝まで水汲みに出掛けたそう。水運搬車は太八車で、囚人を使い前後二人両脇四人の計六人で運んだという。実際にこの地に来てみると坂道も多く、大変な作業であった事だと思像できた。



地元の新聞社『岳南朝日』は今回の話を聞きつけ、我々の活動と共に取材をした。後日発行された誌面には、写真入りで当会の紹介まで載っており感謝。



参加者一同：富士山世界遺産センター屋外テラスより

近場ではあったが一日かけて見聞した研修旅行も終了。今回案内して下さった方々は皆さん地元のエキスパートだったので、地に着いた奥深い内容となった。更に帰りがけには荻野さんが皆さんにと、ご自身で栽培されたサツマイモを沢山下さった。思いがけない嬉しい御土産を抱えながら、夕暮れの中を笑顔で帰路に就いた。

## 【編集室より】

・会報四三号をお届けいたします。世界に蔓延したコロナウイルスの猛威も落ち着きをみせ、堰を切ったように外国人の観光客が日本へ押し寄せてきています。私たちの清水にも「富士山と港」のロケーションを魅力に大型客船が寄港。大勢の外国の方々が街歩きをする姿があります。

海洋文化都市として清水港がまた新たに開発され発展していく一方、元旦に能登を襲った大地震は、この地域に東南海地震への警戒を再び呼び起こす出来事でした。かねてよりの津波対策を兼備した防潮堤緑地化工事にて、『次郎長宅跡』の石碑（平成十一年建立）は、現在撤去されて行政に保管されています。『次郎長堤』もその計画の途上でシートに覆われたままです。

これらの史跡や遺構は単に「次郎長さんの」という事ばかりではなく、清水港発展の歴史を語る上で、過去と未来を繋ぐ大切な建築物であり、今後その保存の重要性を粘り強く行政に提案して行きたいです。



・「富士開墾地と富士山世界遺産を巡る」史跡探訪ツアーは、北村委員による綿密な計画と資料、そして当日は現地の方々からの協力をたまわり、参加者からも大変好評を得ました。

・令和六年度の史跡探訪ツアーは秋ごろに、大政の故郷の愛知県常滑市大野町を予定しています。

「武家の出」は講談・浪曲の創作で、大政は本名を原田熊蔵といい、廻船問屋の長男であったという。旅先では廻船問屋原田家跡地や、江戸時代に尾州廻船が活躍した湊町の風情が残る街並みを散策する予定です。詳細が決まり次第、ご案内いたします。（中田）



天田五郎が撮った  
とも言われる大政  
の写真

## 次郎長翁を知る会 会報「次郎長」43号

令和6年6月1日発行

発行／編集

次郎長翁を知る会

会長 府川充宏

事務局

（公財）するが企画観光局

清水事務所内

〒424-0806

静岡県静岡市清水区辻1-1-3-103

Tel 054-388-9181 Fax 054-388-9182

www.jirocho.com

minowa.jirocho@gmail.com